

平成28年度 文部科学省
総合的な教師力向上のための調査研究事業

「教員養成塾」成果報告書

京都市教育委員会

目次

I 調査研究の概要

- 1 課題意識
- 2 現状の取組
- 3 調査研究の内容

II 京都教師塾での学び

- 1 京都教師塾での学びー第10期京都教師塾からー
- 2 第10期京都教師塾生 卒塾時アンケート

III 学んだことが活かされているか

- 1 進路状況
 - (1) 第9期京都教師塾生 進路アンケート
 - (2) 京都市立学校教員採用選考試験結果
- 2 訪問調査（第8・第9期京都教師塾生）
 - (1) 調査概要
 - (2) ヒアリング結果

IV まとめ

○ 資料

- ・ 冊子『京都教師塾での学びー第10期京都教師塾からー』

I 調査研究の概要

1 課題意識

京都教師塾は平成18年9月に開講し、現在、第11期を迎えている。卒塾生は、採用1年目から9年目までの837名（平成28年4月1日現在）が本市立学校に在籍し、平成20年4月以降の採用者全体の約3割を占めている。

京都教師塾は、採用試験の対策ではなく、将来的にスクールリーダーとして活躍できる人材の育成を目指し、カリキュラムは、教員生活を通じて学び続ける姿勢・意欲を身につけることをねらいとして構成している。平成26年度に実施した京都教師塾の取組成果の検証において、本市に採用の卒塾生は、「今後も学び続ける教師となる意欲を持ち続けているか」の問いに対して96.6%が「ある」と回答している。

本市に採用された卒塾生にとって、教師塾で学んだことがどのように生かされているかを検証し、今後、より有効な教員養成システムを探ることを課題として認識している。

2 現状の取組

(1) 京都教師塾の目的

高い志と情熱・行動力に溢れる塾生に対して、大学で身に付けた専門的知識を基盤として、京都市の教員の熱意溢れる取組や本市教育の理念、市民ぐるみの教育実践に直接触れる機会を提供し、教師として求められている資質や実践的指導力に磨きをかける。

(2) 京都教師塾の状況

- 対象とする学校種・職種：小・中・高・特別支援学校の教諭，養護教諭，栄養教諭
- 定員：300名
- 受講者の募集方法：入塾願書の選考
- 実施期間：10月～翌年6月
- プログラムの内容：カリキュラムの4つの柱
 - ①京都市教育学講座
10月～3月の間に全10回
いずれも平日夜間に補講実施／「教育実践特別公開講座」全6回
 - ②京都市立学校実地研修 10日間
 - ③授業実践講座 4月～5月の間に全2回
 - ④フィールドワーク 3会場以上を選択

○ 教員採用選考試験との関連

京都市立学校教員採用選考試験での受験免除制度は設けていないが、京都教師塾をきっかけに、他府県出身者が京都市の教員を志望する場合もある。平成29年度京都市立学校教員採用選考試験は、直近の卒塾生（第10期生）の約50%が受験し、内定者の約3割を第1期から含めた卒塾生が占めている。

3 調査研究の内容

調査研究に際しては、京都教師塾の学びに対して調査するため、京都教師塾での学びを冊子の形に整理し、第10期京都教師塾の卒塾生に対してアンケートを実施した。

次に、学びがどのように生かされているかを調査するため、第9期京都教師塾生に対して進路アンケートを行うとともに、第9及び第10期生の京都市立学校教員採用選考試験結果をまとめた。さらに、京都市立学校に勤務する採用1及び2年目の卒塾生教員の中から抽出して、訪問調査を実施した。

- (1) 京都教師塾での学びを整理（第10期京都教師塾の取組を冊子としてとりまとめ）
- (2) 第10期京都教師塾生に対する卒塾時アンケート
- (3) 第9期京都教師塾生に対する進路アンケート
- (4) 卒塾生教員に対する訪問調査

Ⅱ 京都教師塾での学び

1 別冊「京都教師塾での学び ー第10期京都教師塾からー」

京都教師塾の学びは、別冊『京都教師塾での学び ー第10期京都教師塾からー』を参照ください。

2 第10期京都教師塾生 卒塾時アンケート

京都教師塾で学んだ塾生の塾に対する印象や満足度、今後の活用期待度等を調査・検証し、今後の塾の運営に反映させることを目的としてアンケートを実施しました。

(1) 対 象

第10期「京都教師塾」卒塾生（修了証受領者）313名

(2) 実施期間

平成28年6月11日～平成28年7月20日

(3) 回答者数

251人（回収率80%） *前期（第9期）：245人（回収率81%）

(4) 概 要 （斜体表記は前期の数値）

「教師塾は全体的に満足」95%（98%） 「学校現場で活用できる」99%（98%）

ア 基本属性

回答者の約7割が大学4回生。大学3回生等で受験資格のまだない者を除くと、9割以上が平成29年度の教員採用試験を受験する見込み。回答者のうち、京都市出身者は4割であるが、京都市の教員採用選考試験を受験予定の者は6割となる。

[回答時の状況]

大学3回生	20人 (8.0%)	大学4回生	178人 (70.9%)	5回生以上	6人 (2.4%)
	5.7%		74.3%		0.8%
短大2回生	3人 (1.2%)	大学院生	5人 (2.0%)	通信制大学	8人 (3.2%)
	2.0%		2.9%		6.9%
講師	21人 (8.4%)	社会人	5人 (2.0%)	その他	5人 (2.0%)
	5.3%		1.2%		0.8%

[出身高校の所在地]

京都市	110人 (43.8%)	京都府 (京都市以外)	25人 (10.0%)
	44.7%		8.2%
近畿 (京都府・市以外)	57人 (22.7%)	近畿以外	59人 (23.5%)
	20.9%		26.2%

[教員採用試験受験予定]

京都市	165人 (65.7%)	出身地 (京都市以外)	63人 (25.1%)
	61.5%		28.3%
京都市・出身地 以外	14人 (5.6%)	私立	2人 (0.8%)
	8.2%		0.8%
その他(民間企 業, 大学院)	6人 (2.4%)		
	1.2%		

イ 入塾後の意識の変化

回答者の9割以上が、教師になりたい気持ちを高めており、京都市を志望する者も7割近くに達した。大学と塾双方の学びの大切さをさらに感じるようになった者が9割以上であった。

	全くその通り	その通り	どちらでもない	そうではない	全くそうではない
教師になりたい気持ちが高まった	154人 (61.4%)	82人 (32.7%)	14人 (5.6%)	1人 (0.4%)	0人 (0.0%)
	62.9%	31.8%	4.9%	0.4%	0.0%
京都市の教員を志望するようになった	99人 (39.4%)	69人 (27.5%)	59人 (23.5%)	22人 (8.8%)	2人 (0.8%)
	39.6%	27.3%	24.9%	4.5%	3.7%
大学の理論・専門知の大切さが分かった	126人 (50.2%)	108人 (43.0%)	12人 (4.8%)	5人 (2.0%)	0人 (0.0%)
	46.9%	41.2%	9.4%	2.0%	0.4%
大学の学びに加え実践の必要性が分かった	136人 (54.2%)	103人 (41.0%)	11人 (4.4%)	1人 (0.4%)	0人 (0.0%)
	57.1%	39.6%	1.6%	1.6%	0.0%

ウ 研修で得られた成果

回答者は、ほとんどが「教師としての資質」及び「実践的指導力」の両方とも向上したと感じている。「学校現場や子どもたちの現状」に関しては98.4%の者が十分学ぶことができたと感じていた。また、「教育を取り巻く諸課題」についても98.0%の者は認識が高まったと感じている。

	全くその通り	その通り	どちらでもない	そうではない	全くそうではない
教師に求められる資質が高まった	91人 (36.3%)	134人 (53.4%)	21人 (8.4%)	5人 (2.0%)	0人 (0.0%)
	39.2%	53.1%	7.3%	0.4%	0.0%
教師に求められる実践的指導力が高まった	70人 (27.9%)	121人 (48.2%)	52人 (20.7%)	7人 (2.8%)	1人 (0.4%)
	24.6%	48.0%	24.6%	2.9%	0.0%
学校現場や子どもたちの現状が学べた	187人 (74.5%)	60人 (23.9%)	4人 (1.6%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
	68.6%	27.8%	3.7%	0.0%	0.0%
教科等の指導法・実践例を学べた	100人 (39.8%)	118人 (47.0%)	27人 (10.8%)	5人 (2.0%)	1人 (0.4%)
	42.4%	44.1%	10.6%	2.4%	0.4%
教育を取り巻く諸課題の認識が高まった	150人 (59.8%)	96人 (38.2%)	4人 (1.6%)	1人 (0.4%)	0人 (0.0%)
	58.4%	38.0%	2.9%	0.4%	0.4%

エ 教師塾が目指すねらいの浸透度

京都教師塾が目指している5つの観点についての設問では、8割から9割強の者が、いずれの観点も向上したと捉えている。とりわけ「教育に対する厳しさと喜びを感じ取れた」とする者（94.5%）のうち「全くその通り」と答えた者が61.4%と高い。反面、「実践に裏付けられた教育哲学をもてた」と答えた者（79.7%）のうち「全くその通り」と答えた者は22.7%と他と比べて比較的低い結果となった。

	全くその通り	その通り	どちらでもない	そうではない	全くそうではない
教育に対する厳しさと喜びを感じ取れた	154人 (61.4%)	83人 (33.1%)	13人 (5.2%)	1人 (0.4%)	0人 (0.0%)
	63.3%	29.0%	6.9%	0.4%	0.4%
教育の果たす社会的責務を自覚できた	132人 (52.6%)	112人 (44.6%)	7人 (2.8%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
	57.6%	38.0%	4.1%	0.0%	0.4%
京都市教育の伝統や市民ぐるみの教育改革の理解が深まった	98人 (39.0%)	109人 (43.4%)	41人 (16.3%)	3人 (1.2%)	0人 (0.0%)
	48.2%	42.9%	6.9%	1.6%	0.4%
子どもたち一人一人を徹底的に大切にする授業を探究できた	122人 (48.6%)	110人 (43.8%)	16人 (6.4%)	3人 (1.2%)	0人 (0.0%)
	50.6%	42.4%	6.1%	0.8%	0.0%
実践に裏付けられた教育哲学をもてた	57人 (22.7%)	143人 (57.0%)	44人 (17.5%)	6人 (2.4%)	1人 (0.4%)
	26.9%	50.6%	18.8%	2.4%	1.2%

オ 教師塾での学びの活用度

卒塾後に、「教師塾の学びは学校現場で活用できる」と捉えている者が、98.8%と極めて高い。また、「教師塾での学びは教員採用試験に活用できる」と捉えている者は、91.7%いる。また、「教師塾は全体的に満足のいくものだった」と回答した者も95.3%と極めて高い結果となった。今後とも、教員として真に必要な資質を磨き高める基盤を培う、進化し続ける教師塾を目指したい。

	全くその通り	その通り	どちらでもない	そうではない	全くそうではない
教師塾の学びは学校現場で活用できる	189人 (75.3%)	59人 (23.5%)	3人 (1.2%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
	79.2%	18.8%	2.0%	0.0%	0.0%
教師塾の学びは教員採用試験に活用できる	152人 (60.6%)	78人 (31.1%)	21人 (8.4%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
	66.5%	29.8%	2.4%	1.2%	0.0%
今後も塾生との交流を続けたい	97人 (38.6%)	92人 (36.7%)	51人 (20.3%)	9人 (3.6%)	2人 (0.8%)
	40.8%	37.6%	17.6%	3.7%	0.4%
教師塾は全体的に満足のいくものだった	153人 (61.0%)	86人 (34.3%)	9人 (3.6%)	1人 (0.4%)	1人 (0.4%)
	63.7%	33.9%	2.0%	0.4%	0.0%

カ 後輩へのメッセージ（自由記述）－抜粋－ ※カッコ内の校・職種は志望

- 他の大学の人や知らない人たちと話をすることで、自分自身をとっても成長させることができます。楽しく「教師になる！」という意識を共に高め合ってください。
（小学校）
- 自らに教師の資質があるか問い続けた1年でした。卒塾する今も、それは変わっていません。学び続ける、挑戦し続けてよいのだと教わったからです。皆さんもがんばってください。（小学校）
- 1回1回の講義でたくさん考えさせられるような問題が飛んできます。それだけ学校現場には課題があります。それに今自分が立ち向かおうとしていること、それを全力でサポートしてくれる教師塾に入ったことに自信を持ち、どんどん課題に立ち向かってください。（中学校）
- 教師塾は一人一人を認めてくれる場所だと思っています。同じ志を持つ仲間、それをサポートしアシストしてくださる先生方と多くの経験や学びを通して、自分にはかない確かな教育観を築いてください。（中学校）
- この場で得られる学び、体験は貴重なものです。しかし、入塾し、何も行動しなければ意味のないものになってしまいます。この恵まれた環境を積極的に活かして、より良い塾生生活を送ってください。（高等学校）
- 教師塾での講義が本当に毎回楽しみでした。大学では学びきれない実践的な内容だと思います。全ての先生方が丁寧に対応してくださるおかげで、安心して講義、フィールドワーク、実地研修に臨むことができました。（高等学校）
- 教師塾で無駄なものは一切なく、一日一日が必ず自分の力になるので、ぜひ頑張ってください。（養護教諭）
- 大学では学ぶことのできない実践的な学びを京都教師塾では学ばせていただくことができます。様々な先生方からの教えや塾生の方々との意見交流を通じて、自分自身の教育観や「教師になりたい」という思いが強くなるはずですが、教師塾でしか学ぶことのできない貴重な学びが多くあります。ぜひ参加してみてください。
（養護教諭）
- 「なぜ教師になりたいのか」「子どもたちに何を伝えたいのか」。自分の軸を見失わず、たくさんの事を学んでください。（栄養教諭）
- 学びの種は沢山ありますが、見つけるのは自分次第です。学びの種を集めて沢山咲かせてください。（総合支援学校）

Ⅲ 学んだことが活かされているか

1 進路状況

(1) 第9期京都教師塾生 進路アンケート

内 容：平成27年6月に卒塾した第9期京都教師塾の卒塾生の進路状況を把握するため、平成28年度及び平成29年度の教員採用選考試験結果等についてアンケートを実施。

対 象：第9期塾生の卒塾生269名（平成28年度京都市教員採用者等を除く）

期 間：平成28年10月28日～平成28年11月15日

回答数：111名（回収率41.3%）

ア 採用状況

平成28年度から平成29年度の期間では、講師を含めて97名87.4%が教壇に立っている、もしくは立つ予定になっている。また、回答者の63名56.8%が正規教員（採用内定を含む）となっている。下表A及びBは、正規教員となった63名について年度ごとに分析している。

表Aは校種・職種別の採用者数であり、平成28年度は29名、平成29年度は34名が正規教員となっている。校種は、約半数が小学校である。平成29年度の養護教諭の内定者には、勤務校種が決まっていない者もいる。職種は57名90%が教諭であり、残る6名10%が養護教諭となっている。栄養教諭の該当者はいなかった。

表Bは地域別の採用状況である。京都市・京都府を含む近畿で7割を超えており、その他の地域が3割となっている。九州・沖縄、東北・北海道の該当者はいなかった。なお、「(2)京都市教員採用選考試験結果」に記載があるが、本進路アンケートの対象外とした第9期生で平成28年度の京都市教員採用となった者は33名（※合格者は34名）である。

表A 採用状況（校種・職種別）

年度	職種	小学校	中学校	高等学校	総合支援学校	未定	計
28	教諭	14	7	5	1	—	27
	養護教諭	1	1	0	0	—	2
29	教諭	18	5	4	3	—	30
	養護教諭	0	0	1	0	3	4
28	教諭	32	12	9	4	—	57
	養護教諭	1	1	1	0	3	6
計		33	13	10	4	3	63

表B 採用状況（地域別）

年度	京都市	京都府	近畿	東海・北陸	中国・四国	関東・信越	計
28	(33)	4	16	2	3	4	29
29	20	0	5	3	2	4	34
計	20	4	21	5	5	8	63

イ 今後、京都教師塾で学んだ内容をどのように役立てようと考えているか

(自由記述－抜粋－)

<平成28年度教員採用選考試験で正規教員になった者>

- 学んだことが今力になっています。もっと勉強してさらに教師として一人前になりたいです。まだまだ未熟だった私を入口に立たせてくれた京都教師塾には感謝しています。(小学校教諭)
- 様々な視点から話して頂いた講演の内容はもちろんですが、塾生同士で語り合った教師の軸や理想の教師像が慣れない社会人1年目の支えになっていると日々感じます。(小学校教諭)
- 学校実地研修は直接生徒と触れ合う機会でもあり、授業をする上でも大変勉強になりました。大学時代の教師塾での経験は大きかったです。教師塾で学んでよかったです。(中学校教諭)
- 今、高校で勤務しているが、学校実地研修は小学校であったので、違う視点でも物事を考えることができます。(高等学校教諭)
- 教員になると日々の業務で専門性は身に付きますが、教育の基本について学ぶ機会は少ないように思います。教師塾で学んだ知識や教育理念はとても役立ちます。(養護教諭)

<平成29年度採用選考試験で正規教員(内定)になった者>

- 教師塾では大学の講義では学ぶことのできない学校現場の現状や教師に求められる資質・能力等について学ばせて頂きました。教育学講座では多様な内容のものが予定されており、たくさんの発見・気づきがありました。また、学校実地研修では現場の先生方が日々子どもたちに熱意をもって関わっておられ、私もそのような先生方のようになりたいと思うようになりました。今後も教師塾で学んだことを生かして一人の教師として精進して参ります。(小学校教諭)
- 教師塾で学んだことは自分の中で教師としての土台となっています。この土台の上に来年4月から教師としての経験と研修を積み重ね児童、同僚、保護者から信頼される教師を目指します。(小学校教諭)
- 講師をしながら教師塾に通いました。周りは教師を目指す仲間ばかりで刺激を受けました。講師は経験があるからなどは考えずに一緒になって勉強に励むことができたことが今の力になっていると思います。学んだことを生徒に還元する学び続ける教師であり続けようと考えられたのも教師塾があったからです。(中学校教諭)
- 教師塾の分散会ではどうしたら分かりやすく物事を伝えることができるかを常に考えながら話しました。この経験を今後も生かしていきたいです。(総合支援学校教諭)
- 養護教諭の専門講座は本当に学びが多く「養護教諭になりたい」と強く思ったことを今も覚えています。今後も公開講座などを通じ、学びたいと思っています。(養護教諭)

<平成28年度講師・平成29年度講師予定の者>

- 毎日の忙しさで、勉強できる時間がなかなかとれません。教師塾で学んでいた濃厚な日々がどれほど貴重なものであったかを痛感しています。レポートへの記述はとて大変でしたが、今になって一行でも多くの学びや発見をそこに残しておいたことがとても役に立っています。今後も何度も立ち止まって読み返すことでしょう。
(小学校教諭)
- 学校現場で働くようになり、自身の未熟さ、力不足を実感しています。生徒と向き合い保護者と関わり一日一日を過ごしていく中で私の人間としての力が試されているように感じます。そんな時、教師塾で学んでいた時のメモを見返すと、学生時代に目指していた理想の姿に近づけているのかどうか考え、明日からまた一步進もうという気持ちになることができます。生徒には「力」ではなく「心」で勝負するという言葉を胸に日々研鑽に励みます。(中学校教諭)
- 実地研修やフィールドワークで現場の様子を参観し、実際に生徒と関わらせていただいた経験は、働き出してから、とても価値のあるものだったと感じています。
(高等学校教諭)

(2) 京都市立学校教員採用選考試験の状況

第9期生は、卒塾生の約半数が受験し、34名24.8%が合格している。第10期生においても、前期とほぼ同様の傾向があり、約半数が受験し、41名27.0%が合格している。全体の合格率(平成29年度試験15.1%)と比較すると、塾生の合格率(平成29年度試験27.0%)は高くなっている。

また、過年度の卒塾生を含めた採用試験の年度別の合格者数について、平成28年度教員採用試験では、第9期生の他に第1～8期生の65名が合格している。合わせて99名となり内定者の31.1%を占めている。平成29年度採用選考試験では、第10期生の他に過年度66名が合格し、合わせて107名となり、内定者の35.5%を占めている。

A 第9及び第10期生の合格者数

期	試験年度	受験対象者	受験者	合格
9	28年度	289名	137名 (47.4%)	34名(24.8%) (9期生を除く全体の合格率17.1%)
10	29年度	291名	152名 (52.2%)	41名(27.0%) (10期生を除く全体の合格率15.1%)

B 平成28及び29年度教員採用選考試験における過年度の塾生も含めた合格者数

試験年度	第9期	第1～8期	計
28年度	34名	65名	99名 (内定者のうち、卒塾生の割合31.1%)
試験年度	第10期	第1～9期	計
29年度	41名	66名	107名 (内定者のうち、卒塾生の割合35.5%)

2 訪問調査

(1) 調査概要

ア 目的

京都教師塾の卒塾生の学校現場での状況を直接、卒塾生の教員からヒアリングし、教員養成段階での課題を見つけ、今後の京都教師塾の改善に反映させる。

イ 対象者

- ・小学校及び中学校の教員で計30名
- ・採用2年目の第8期卒塾生（平成26年6月卒塾）から抽出
- ・採用1年目の第9期卒塾生（平成27年6月卒塾）から抽出
- ・抽出者は、すべて卒塾の翌年度の4月に採用
- ・新規卒業での採用者は28名、その他2名

校種	第8期（採用2年目）			第9期（採用1年目）			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
小	3	10	13	1	5	6	4	15	19
中	2	2	4	3	4	7	5	6	11
計	5	12	17	4	9	13	9	21	30

ウ 訪問期間

平成28年7月19日～平成28年9月2日

エ 聞き取り項目

- ① 子どもとの関係
- ② 教職員との関係
- ③ 保護者との関係
- ④ その他
 - 仕事の姿勢・考え方など
 - 京都教師塾で学んだこと・印象に残っていることなど

(2) ヒアリング結果

①子どもとの関係

<1年目小学校>

- できるだけ子どもに話しかけ、関わりを持つように心がけているが、多忙で十分にできていない。
- 子どもたちの実態と付けるべき力を見定めることに難しさを感じている。
- 授業は、学力不振の児童への対応が中心となり、他児童の学力伸長を今後の課題としている。
- 規律を守ることが弱い。子どもたちにとって45分を長く感じさせてしまっている。引き付ける力が足りないと思う。
- 指導書どおりには進められない。全体指導が難しい。叱ることが苦手。
- 目指す姿をしっかりと捉え、課題をクリアしていきたい。
- 4～5月は大変であったが、少しずつ子どもとの信頼関係が築けている。
- 課題のある児童との関係づくりがうまく構築できていない。
- 子どもが理解できるよう、丁寧でわかりやすい言葉使いを心掛けている。
- 休み時間でもできるだけ子どもと触れ合うようにしている。

<1年目中学校>

- 学級経営は難しいと感じている。目標は掲げているが、行動に移せない状況であり、ベル着も徹底できていない。夏休明けの課題として取り組んでいく。
- 元気のある生徒が多く、そのパワーに負けないよう頑張っている。
- 課題のある生徒と十分な関係が築けていない。
- 年齢が近く、生徒の話によく耳を傾け、悩み相談も受ける関係性ができている。一方、生徒から慕われ友達関係のようになり、授業中に盛り上がりはじめがなくなることもある。生徒が楽しい・分かると感じられる授業を目指している。
- 女子生徒の指導に困難さを感じる。(男性教諭)
- 課題のある生徒への対応では、苦勞している。
- 授業で生徒がどこで躓くか予想できないことがあり、すぐに手立てが打てない。
- 初めてのことばかりで手探りの状態である。
- 一人一人が達成感を味わえる授業づくりを目指している。

<2年目小学校>

- 1年目は、個への指導を優先し、学級全体の指導がうまくできていなかった。2年目は、子どもが静かになるまで待つことを徹底している。子どもの良さを見る余裕ができ、褒めることが多くなっている。
- 子どもの発想の柔軟さにも気づけて、教師としての喜びを感じる。
- 日々子どもたちの成長を身近に感じられることに喜びを感じる。
- 授業はとても大切であり、教材研究を深めたい。配慮を要する児童など個々の発達への対応ができたうえで、授業力を向上させることが今後の課題。
- 子どもたちの特質を見極め、褒めるタイミングやその子に合った支援に難しさを感じている。
- 休み時間など子どもたちと積極的に接し、関わり方を学ぶようにしている。
- 1年目と2年目では、担当する学年が3年から6年にかわり、子どもとの距離が近くなり、友達のような感じになってしまっている。
- 成長したと思える点は、子どもの話を聞くことができるようになったこと。
- 子どもたちが進めていく授業、子ども同士でつないでいく授業を目指している。
- 子どもが楽しく学校に来られるような学級づくりを心掛けている。行き過ぎて、子どもとなれ合い関係にならないように注意している。
- 1年目の4～5月は、見通しがもてずに慌ただしかった。2年目は、4月に学級経営（ルール等）を徹底している。
- 課題のある児童への対応や学級全体の指導で不十分さを感じる。
- 採用1年目に課題のある学年と児童を担当して成長できた。
- 課題のある児童について、背景に迫ることが必要だと理解している。
- 女子児童の指導が課題だと捉えている。（男性教諭）
- 子ども達と本心で向き合えたと感じる瞬間があり、嬉しく感じる。
- 子どもが自分で考える授業の難しさを感じている。
- 1年目は、配慮や支援が必要な児童への指導や関わり方やクラス児童との関係づくりに悩んだ。2年目は、児童との関係づくりを重視した取り組みを大切にしている。児童の良さや成長の瞬間を見逃さないように気を配って指導している。
- 児童間の交流や発表を通じて、個の力を高めさせたい。児童（高学年）の自主性をどこまで尊重し、任せるかが難しい。もう少し担任から指示を出し、型を示す必要があると感じている。

<2年目中学校>

- 1年目の反省をもとに、2年目の学級経営は、より具体的で生徒の良さを活かそうとする手立てや工夫をしている。
- 普段から生徒と2人で話す状況をつくることで、教師から生徒への話しかけに対して、生徒が構えることがないようにしている。
- 自分の中学校時代より今の生徒はおとなしいので、対応はできているが、支援を要する生徒が多いことは思いのほかだった。
- 学級活動に参加しない子どもへの対応に苦慮している。一人一人を見ていくことを課題として取り組む。
- いいところを共有できる学級になっている。

②教職員との関係

<1年目小学校>

- 同学年のベテラン担任に相談できている。他の教職員にも助言を受けている。
- 学年主任，教務主任，初任者指導の先生と相談できている。
- 学年主任や初任者指導の先生を中心に相談し，アドバイスを受け実践している。
- 同学年の先生，管理職とも積極的にコミュニケーションをとっている。

<1年目中学校>

- 分掌は前年度を踏襲することで自分からはできていない。係として発信できるよう見通しをもって取り組んでいきたい。
- 授業のペース配分がわからない中，他の教員との進度を合わせることが難しい。教科会・初任者指導員のアドバイスを受けながら改善に向けて取り組んでいる。
- 先輩の先生方から，困った時の対応の仕方や経験なども教えてもらっている。
- 学年主任を中心に，他の教職員から助言を受けている。
- 教職員とは普段からコミュニケーションをとり，助言等を受けている。
- 6クラスの学年集団だが若手を中心にまとまっており，担任団の一員として，同僚から指導を受けている。

<2年目小学校>

- 2年目になり教職員とも良好な関係を気づき，親睦も図れている。
- 若手の担任が多いが，それを支えるベテランもおり，積極的に他の教職員とコミュニケーションを図り，連携している。
- 悩みはため込まず，他の教職員と話したり相談したりするようにしている。
- 学年の先生方とは，良好な関係。何でもお互いに相談できており，児童に関する情報交換も頻繁にしている。
- 周囲の先生方から細かく指導を受けている。
- 学年の先生方とのコミュニケーションは取れており，同僚性が保たれている。
- 教職員との良い関係性を築くことは，一番大切であると感じている。
- 当初，準備や動きの見通しが持てずもたつきがあったが，学年教員の支援でスムーズに動けるようになった。

<2年目中学校>

- 先輩教員に対して役割分担の依頼や関係づくりに悩むことがある。
- 教科会（英語科）で相談すれば，アドバイスを受けることができる。教科指導について考えを熱心に討議するなど話し合える関係にある。
- 教職員からは多くを学んでいる。
- 教職員とは，短時間での情報交換をしている。
- 何事も楽しんでいる教員にはやる気を感じるので，影響を受けている。

③保護者との関係

<1年目小学校>

- 保護者と「連絡を取りあっている」つもりになっていないか、その向き合い方に不安を持っている。
- 家庭力が弱い場合、保護者とのコミュニケーションの取り方を工夫する必要があると考える。
- 土曜日の地域の行事等もほとんど参加している。保護者の力は大きいし、とても頼りになると感じている。
- 授業参観で落ち着かない子どもがおり、指導力等に不安を感じられた。
- 不安を感じている保護者とは積極的に連絡を取っているが、余裕がないためか他の保護者との関係は十分ではないと認識している。

<1年目中学校>

- 不登校の生徒の保護者は、別室指導に納得しておられず、対応は大変。理解してもらえよう、管理職・同僚に相談しながら取り組んでいる。
- 京都教師塾で保護者の想いや願いなどを知ることができた。保護者の想いや願いがどこにあるか聴き、受け止め、丁寧な対応から信頼に結びついている。
- 地域懇談会などには積極的に参加し、保護者の方々と話し合うなど連携を図ろうとしている。
- 保護者対応では、対応に失敗もしているが、一つ一つ経験を積んで学んでいる。
- 保護者に上から目線と受け取られる説明をしてしまい、校長から指導を受けた。経験を重ねることが必要だと感じる。
- 一部の保護者の信頼を得るのに苦労している。

<2年目小学校>

- 1年目は、指導面等で保護者の不安を解消しきれなかったが、2年目は、信頼関係ができつつある。
- 担任からの言葉の真意が子どもに正しく伝わらず、異なった意味で保護者に伝わり、保護者から聞かれる場合があった。子どもへの説明をより丁寧にする必要性を感じている。また、保護者が気にされることを認識できるように努めている。
- 1年目は、保護者に子どものいいところ・頑張っているところを見逃さず十分伝えきれていなかった部分があり、改善したい。
- 不登校の子どもの保護者の対応が難しい。忘れ物も多く、保護者と話す機会は多いが、日によって、保護者の対応が異なる。保護者の思いを受け止め、乗り越えたい。
- 良いところは連絡（電話・家庭訪問）するよう心掛けている。
- 保護者との連絡を細目取るようにしている。
- 課題のある児童の保護者とも、児童との信頼関係を築くことで、良好な関係を保つことが出来た。
- 保護者との関係は、信頼をされていると感じるときもあるが、関係を十分に築けていない保護者もいる。
- 保護者には細目に連絡をとるよう意識しているが、保護者の不安や悩みに寄り添えているか不安に感じている。
- 指導面のことだけでなく、子どもの頑張りを伝えるようにしている。

<2年目中学校>

- 家庭環境の厳しい生徒の保護者との関係で、生徒の問題行動の伝え方や表現の仕方、寄り添い方が難しく感じている。
- 特に支援を要する生徒の保護者の対応は難しい。自分が勉強不足であることを痛感する。
- 保護者に自分の思いを伝えにくいことがある。

④その他

仕事の姿勢・考え方など

<1年目小学校>

- 責任の重大さを思った以上に感じている。
- 朝起きたときにしんどいと思うときはあるが、学校に来て子どもたちに会うと元気になる。
- クラスがもっと一体感を持てるようにしたい。
- 子どもたちの多様な価値観を育てる指導を目指している。
- 分かったつもりにならず人の話をよく聞く姿勢を大事にしている。
- 忙しいし、時間に追われているが、どんどんチャレンジしたい。
- 仕事を楽しみ、笑顔でいられるように心がけている。
- 信頼を得るために子どもや保護者の話をしっかり聴き、受け止め、改善に向けて取り組んでいる。子どものためにどんなことでもしていきたい。
- 子ども達が楽しく学習に取り組み、確かな学力を身に付けさせていきたい。
- 分かる授業を最優先に考え、教材研究に取り組んでいる。

<1年目中学校>

- コミュニケーションを大切にしている。
- 今思えば、学校実地研修、学生ボランティアは表面的に仕事を知っただけだった。実際に教員になり、責任を持ち、担当することの厳しさを実感している。
- 校務分掌など仕事量が多く、優先順位をつけられないこともあった。リストをつくり、空き時間を使い効率よく進められるよう努めている。
- 分かりやすい授業を目指して教材研究をしている。
- 生徒に「人生の楽しさ」を教えられる教師になりたい。そのために、何事にも前向きに、しんどい事も嫌がらず、皆で協力できる生徒を育てたい。
- 準備不足で授業をすとうまくいかない。1年目の間に初任者指導員の先生から授業のアドバイスをしっかり受けたい。
- 今の悩みを乗り越えたとき成長できると思い頑張っている。
- 常に自分を振り返り成長したい。
- 同期の先生との交流を大事にしたい。

<2年目小学校>

- 子どもたちが他者の意見に「はっ」と気づきを持つような授業を目指している。
- 仕事とプライベートの切り替えを大切にしている。
- 子どもたち同士がお互いのよいところに気づき認め合う学級経営に取り組んでいる。
- 学ぶ姿勢として、アンテナを張り、子どもに伝えられることはないか考えている。
- 自信をもって指導できる教員になりたい。
- 学年主任を任されたが、学年の教員と共になんばって学級や学年の経営にあたっている。
- 自分の課題（児童との関係）や今後の方向性（中高学年に向けての児童の育ち）を自覚している。
- 常に自分にプレッシャーをかけ、しっかり考えるようにしている。また、様々なことにも興味を持ち、社会に目を向けている。
- 仕事において「学び続ける」と「謙虚」さが大切だと考えている。
- 大学の同期生と交流することが、現場のしんどさを乗り越えるパワーになっている。他職の大変さを知る事で、プロとしての教師の自覚も生まれている。
- 運動会での演技など子どもたちの頑張りが実を結んだ時の感動を大事にしている。
- 教材研究や子どもたちのことなど、自身で勉強したり先輩教員に訪ねたり、学び続ける姿勢を大切にしている。
- 子どもへの指導やかかわり、教職員との連携、親との信頼関係の醸成など、一つ一つ経験を重ねている。

<2年目中学校>

- 学ぶ姿勢（謙虚さ）、振り返ることを大切にしている。
- 子どもと関わる時間を大切にしている。
- 失敗を恐れず熱い思いをもって取り組むことを大事にしている。
- 丁寧な言葉遣いを意識している。

京都教師塾で学んだこと、印象に残っていることなど

<1年目小学校>

- 教師塾ではレポートの作成を通じて自分の考えを素早く整理し、文章にできるようになった。また、分散会での意見交換で、自分の中の決意がより鮮明になった。
- 模擬授業がよかった。他の人の授業が参考になった。今思うと、授業をすることに精一杯だった。子どもの反応を考えて工夫するなど、もっと準備ができたと思うし、もっと練習すればよかった。
- 学校実地研修がとても参考になった。研修先の先生が理想的な取組をされ、憧れを感じる。研修先で出会った先生方の姿から京都市で教師をしたいと強く思った。
- 担任として困った時、教師塾でのレポート集を読み返し、励みとしている。

<1年目中学校>

- 教師塾の協議スタイルによる学びの手法は、今でも役立っている。
- 教師塾では、他大学や他校種の学生等と話すことで、自分とは異なる意見を聞く態度を身に付け、さらに自分の考えを整理し、相手に伝える経験ができた。現在教員をするうえで、活かされている。
- 学校実地研修や学生ボランティア経験を通じて、教員や生徒・保護者等の雰囲気が学校ごとに異なっていることがわかった。

<2年目小学校>

- 教師塾で京都市独自の取組などを学んだことが、(県外出身の自分にとって)学校現場の理解に役立っている。
- 学校実地研修は、教育現場を深く知る良い機会となった。
- 学校実地研修で、先生の仕事を見ることができた。振り返ると、子どもへの先生の対応をもっと注意深く見れば、もっと勉強になったと思う。
- 学校実地研修や学生ボランティアを通して、子どもや先生方と関わらせてもらったことが、今の原動力になっている。担任をしてみて、責任の重さを痛感している。
- 特に学校実地研修からは多くの学年やクラスに入らせてもらった経験が、今の学級経営や授業の進め方などのヒントになるなど大いに参考になっている。

<2年目中学校>

- 学校実地研修では、余裕を持って子どもと関わることができたのがよかった。
- 学校実地研修で「生徒一人一人を大事にしている」理想の教師像に出会った。
- 困ったときに、教師塾レポートを読み返している。
- 先生以前の間人として誠実でありたい。これは塾でも学んだこと。
- 塾で初めて、なぜ教師になりたいのか、という思いを話すことができ、それを共感してもらったことにより、自分の考えを整理できた。
- 短時間でのレポート作成は、リズムがよかった。また、教師塾スタッフに見ていただけなので、より真剣に取り組むことができた。
- 学校実地研修では、経験だけではダメで、チャレンジする必要性を学んだ。
- 模擬授業の最後に主事が講評を踏まえた模擬授業をしてくれた。衝撃的で感動した。教科教育に対する考えの支えになっている。
- 同じ目標を持つ者との協議では、ストレートに自分の思いを話すことができた。そして、それをみなが受け止めてくれた。とても安心感があった。

IV まとめ

○京都教師塾での学び

第10期京都教師塾での学びに対する塾生の満足度は前期と同様に非常に高い。このことは卒塾時アンケートの結果から伺える。5つの選択肢がある設問に対して「全くその通り」「その通り」と回答した割合は、「教師になりたい気持ちが高まった」は94.1%、「学校現場や子どもたちの現状が学べた」は98.4%、「教育を取り巻く諸課題への認識が高まった」は98.0%、「教師塾は全体に満足のいくものだった」は95.3%である。

今回、第10期京都教師塾での学びを整理し、京都市教育学講座の概要版をとりまとめた。半年にわたり開催する京都市教育学講義が教師塾での中心の柱となる。塾生は、講義を通して教育の現状・課題、京都市の教育の取組について、理解を深めると同時に教師になることの覚悟を問われ続けることになる。

講義後の分散会では、校種、職種、採用希望自治体、大学の枠を越えた同じ志を持つ仲間との協議により、多くの塾生は、教員になりたい気持ちを高めている。このことから、京都市以外での自治体での教員を志望する者も受け入れるという開かれた学びの場という創設当時からの一貫したスタンスは、今後一層大切にしなければならないと認識している。

塾生は、講義、そして、その後の分散会で学んだことを、フィールドワーク、京都市立学校実地研修、授業実践講座において確かめるとともに、実際の学校現場の教職員、子どもたちに接することにより、体験的に学び、自らの力に変えていく。

記録としても残る「レポート集」は、時間の経過とともに重みが増している。塾生は、講義、分散会で学んだことを塾生に1冊ずつ配布されるレポート集に記述する。毎回、時間は約15分、分量は自由である。A4で1枚の枠に学んだことを漏らすことなく書きとどめる。短時間でまとめて書くことが大きな力になっている。また、校長経験者スタッフによるレポートへのコメントも地道な作業であるが、塾生への励ましとなっている。今回、とりまとめた冊子には塾生のレポートも合わせて掲載している。塾生一人一人のレポート集は、卒塾時に受け取る修了証書とともに学んだ証となっている。

○京都市立学校教員採用選考試験への受験状況

京都市の教員採用選考試験の受験を入塾の要件とはしていないが、採用試験では、例年6月に卒塾した塾生は約半数が京都市を受験し、合格率は25%前後と一般より高い。また、過年度の卒塾生を含めると内定者全体のうち約3割を卒塾生が占めている。教師塾での学びを通して、結果的に他都市志望から京都市志望になる塾生も少なくない。

第10期までに入塾者は4000名を超え、京都市だけでも837名が教壇に立っている（平成28年4月1日現在）。卒塾生の約半数は京都市を受験しておらず、全国でも多数の卒塾生が教員として活躍していることが推測される。第9期京都教師塾生の進路調査結果からは、回答者111名のうち、講師も含めると97名87.4%が教員となっている（平成29年度の予定を含む）。京都教師塾はオープンである。京都教師塾で学んだうえで他自治体の教員になった卒塾生により、京都市の教育を全国に広めることにもつながっている。

○京都教師塾の卒塾生教員の状況より

卒塾生の教員の実態を把握するとともに、実際に教員となって、教師塾での学びを振り返っていただき、それをもとに検証し、今後の教師塾の運営に活かしたいと考えた。ヒアリングの対象者を絞るにあたって、教師塾での学びの影響が大きいと考えられる者とした。対象者は、全員6月に卒塾後、京都市教員採用選考試験を受験し、翌年度4月に採用された1年目もしくは2年目であり、全員で30名。2名を除く28名は新規卒業での採用者である。校種・職種は、小学校あるいは中学校の教諭である。

まずは、採用1年目の教員である。ヒアリングは13名に対して行った。時期は7～9月に実施しており、実質の勤務は1学期だけである。状況は、想像以上に多忙であり、子どもと向き合う時間が十分に確保できない、指導書通りには進められない、また、課題のある子どもと十分な関係が築けないなどである。保護者との関係でも、信頼関係はまだ十分ではないと認識している。課題に対しては、管理職、周りの教職員に相談し、アドバイスを受けながらも、目指す姿をしっかりと捉え乗り越えようとしている。責任の重大さ、教員の厳しさを実感している。採用前は、表面的にしかわかっていなかった、という意見もあった。しかしながら、今はできていないが、多くの卒塾生は、「クラスがもっと一体感を持てるようにしたい」「今の悩みを乗り越えたとき成長できると思い頑張っている」などと力強く語ってくれた。

採用2年目の教員へのヒアリングは17名に対して行った。見通しを持つことができているので、子どものことをよく見ることができている。結果、保護者との信頼関係も築けている。一方、課題のある子どもへの対応では苦慮しているケースも少なくない。このようなケースでは、保護者との関係は、信頼されていると感じる時もあるが、関係を十分に築けていない保護者もいることになる。また、保護者へ思いを伝えるに苦しいと感じている。一つ一つ経験を重ね、失敗を恐れずに取り組むことを大事にしている、ということを前向きに話すなど、1年目の反省をもとに、課題を乗り越えようとしている。

京都教師塾は、採用試験のための塾ではなく、テクニックを教える場でもない。採用試験には役立つものとはなっているけれども、京都教師塾が目指すべきものは、“学び続ける教師”である。教員として数年を経ても京都教師塾の学びが活かされるものでありたいと考えている。採用後は、教師塾での学びがどのように活かされているのだろうか。主だった意見としては、「レポート集は今でも大事にしている」「分散会での協議を通して身に付けた態度などは今も活かされている」「学校実地研修で様々なクラスに入らせてもらった経験がプラスになっている」「授業実践講座の際の担当主事による講評を踏まえた模擬授業は、担当教科に対する考えの支えになっている」などであり、教師塾を通して、主体的に学んだことが、今、現在の一つの支えになっていると言い換えることができる。

京都市に採用される卒塾生教員の実態調査を継続して行うことが必要である。卒塾生教員を通して、子どもとの関係、保護者との関係などの現状・課題、塾での学びの成果などを把握し、教員を目指す塾生に伝えることが重要であり、このことを通して、現場からも求められる教員を輩出することになると考える。調査研究事業後もヒアリングを積み重ね、卒塾生教員の傾向、特性を少しでも明らかかなものとし、それを教師塾のカリキュラムに反映させることで充実を図っていきたい。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、京都市教育委員会が実施した平成28年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。

京都教師塾での学び

— 第10期京都教師塾から —



大

京都市教育委員会

文部科学省「平成 28 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業」

京都教師塾での学び

—第 10 期京都教師塾から—

目 次

- ・ 京都教師塾とは／京都教師塾が目指すもの …………… P 2
- ・ 京都教師塾 4つの柱 …………… P 3～9
- ・ 第 10 期京都教師塾 入塾から卒塾まで
 ／第 10 期京都教師塾 入塾者数等 …………… P10
- ・ 第 10 期京都教師塾 京都市教育学講座 …………… P11～93
- ・ 第 10 期京都教師塾 塾生の卒塾時アンケートより …………… P94～96

京都教師塾とは

京都市では、「教師になろう」という高い志と情熱・行動力にあふれる学生・社会人に対して、大学で身に付けた専門的知識・技能と本市教員の熱意溢れる取組や市民ぐるみの教育実践を融合させ、本市の教育理念への理解を深めるとともに教師に求められる資質や実践的指導力を養成する教師塾を平成 18 年 9 月に政令指定都市で初めて開講しました。

既に 4000 名を超える塾生が、京都市の教育実践を学び、そのうち、837 名が京都市立学校に採用される（平成 28 年 4 月現在）など本市はもとより近畿圏を中心に全国で活躍しています。

京都教師塾には“4つの柱”があります。「京都市教育学講座」「京都市立学校実地研修」「フィールドワーク」「授業実践講座」です。塾生は 10 月に入塾し、9 月をかけて、塾生同士で切磋琢磨しながら主体的に学び、学んだ証としての自らのレポート集を携えて卒塾していきます。

本冊子は、この“4つの柱”の内容とともに平成 27 年 10 月に開講した第 10 期京都教師塾での京都市教育学講座の各講義の概要を掲載しています。

是非、ご一読いただき、今後の教員養成の取組の参考にしていただければ幸いです。



入塾式

京都教師塾が目指すもの

京都教師塾では、子どもたち一人一人を徹底的に大切にする京都市教育の伝統を踏まえ、次の 5 つの観点に基づいた学びを深めてほしいと考えています。多くの仲間たちと高め合い、磨き合いながら、「学び続ける教師」を目指します。

- ◇教育に対する「厳しさ」とともに「喜び」を体感する
- ◇教育の果たすべき社会的責務を自覚する
- ◇京都市教育の伝統を踏まえ、市民ぐるみで進める教育改革の理解を深める
- ◇子どもたち一人一人を徹底的に大切にした授業の在り方を探究する
- ◇実践に裏付けられた教育に対する深い哲学を持つ

京都教師塾 4つの柱

京都教師塾が目指す5つの観点を身に付けるために、「京都市教育学講座」「京都市立学校実地研修」「フィールドワーク」「授業実践講座」の4つの柱でカリキュラムを構成しています。

1 京都市教育学講座

「京都市教育学講座」は、京都市教育の具体的な教育実践に直接ふれ、教師に求められる資質や実践の指導力、喫緊の教育課題についての理解を深める講座です。

(1) 講座の種類

① 共通で履修する講座	(7回)	必修
② 校種・職種別の専門講座	(3回)	必修
③ 教育実践特別公開講座	(6回)	3講座選択

- 必修である「共通で履修する講座」「専門講座」は、すべて全体会と分散会の2部構成となっています。
- 分散会では、塾生が10組にわかれ、グループアドバイザーの指導のもと意見交換を行います。
※グループアドバイザーを担っているのは、新規採用教員を指導している教員です。
- 「専門講座」は各回でいずれかの講座を選択し、受講します。
- 「教育実践特別公開講座」は、塾生とともに、一般の学生や大学関係者、社会人にも広く公開し、京都市の教員採用内定者の研修にも位置づけています。塾生は、自らの関心や身に付けたい内容に応じて、3講座以上を選択し、受講します。受講後、学びをレポートに記入し、提出します。

(2) 講座の流れ

ア 全体会

- ① 講義／実践発表／パネルディスカッション 等
- ② 振り返り(①の内容を受けて、全体で意見交流を行う)



イ 分散会

- ① 方向付け
[進行]グループアドバイザー
- ② 少人数グループでの話し合い
[進行]各グループの進行役



基本の進め方

- まずは、講義等で各自が学んだことをもとに、次の3点についてのキーワード（5～10文字程度）を付箋に記入し、台紙に貼ります。（3分以内）

◎講義等から学んだこと	…桃色の付箋（3枚）
◎自分が学校現場で取組みたいと思っていること	…黄色の付箋（2枚）
◎教師を目指す中で、不安に感じていること	…青色の付箋（2枚）

- 次に、少人数グループで話し合います。（約40分）

- * [桃色の付箋を中心に]→ [黄色の付箋]
→ [青色の付箋]
- * 単なる感想や意見の交流にとどまらず、付箋をもとに学び取ったことを核にして少人数グループでの話し合いを進めます。
- * 伝えたいことを分かりやすく整理して、端的に話すように心がけます。
- * 一人一人の思いや考えを傾聴します。



③ 全体交流 [進行・まとめ]グループアドバイザー

- まずは、グループでの話し合いをもとに、全体で意見交流を行います。（約25分）
 - * 少人数グループの話し合いをまとめて報告する（例：「○○のような意見が出ました」）のではなく、少人数グループでの話し合いを通して自分自身が学んだこと、心に深く刻まれたことを発表し、意見を交流します。
- 次に、分散会全体でのまとめをします。



④ レポートの記入（約15分）

*学んだことや考えたことを分かりやすく整理して、時間内に書きまとめます。

次の内容について、もれなく記述します。（それぞれの項目の分量は自由）

- 全体会 講義・パネルディスカッション・実践発表から学んだこと
- 分散会 グループでの話し合いや分散会での全体交流を通して学んだこと
- まとめ さらに深く学びたいことやチャレンジしたいと思っていること

⑤ レポート集の提出

*レポート集は、分散会場で記入後、提出します。

*預かったレポートは、校長経験があるスタッフがコメントし、次回の教育学講座の際に返却します。



(3) 講座開催日（土曜日）に出席できない場合

ア 補講への出席（教育実践特別公開講座以外）

講座開催日の翌週火曜日の夜間（原則18時20分開始）に補講を行います。土曜日と同じように進行します。



補講の様子

イ DVD視聴

補講にも出席できない場合は、講義内容を収録したDVDを視聴し、学びをレポートに記述し、提出します。

<学びの広場>

京都教師塾通信「学びの広場」を発行し、毎回の取組概要や成果を紹介しています。

（1期につき12回）



学びの広場

2 京都市立学校実地研修

「京都市立学校実地研修」では、本市の学校現場で子どもたちとふれあい、教職員の教育実践の場に参加することを通して、教師として子どもへの関わり方（「ほめ方やしかり方」「子どもへの言葉のかけ方」等）や教職員間及び家庭・地域の方との連携の大切さ等を学びます。

塾生一人一人が自分の課題を見つけ、今後の自己研鑽につなげます。実地研修終了後に学びをレポートに記述し、提出します。

(1) 期間・時間

- 11月下旬から翌年3月末までの間の10日間（連続する日とは限らない）
- 研修時間は各研修校の勤務時間（例 午前8時30分～午後5時）が基本

(2) 研修内容

- ◇学級経営等にかかる学級担任補助
- ◇各教科等におけるチーム・ティーチング等の指導補助
- ◇特別な教育的支援が必要な子どもへの指導補助
- ◇部活動など放課後における児童・生徒に対する指導補助
- ◇公開された授業を通じた授業研修
- ◇その他、実地研修を実施する学校の校長が適当と認める教育活動



学校実地研修（授業中）



学校実地研修（中間休み）

3 フィールドワーク

フィールドワークは、自らの関心や身に付けたい内容について、京都市の教育の現場を実際に訪れ、教育に対する見識を広げ深めることを目的としています。京都市立学校の研究発表会や研究会^(*)主催事業等の本市の特色ある取組など様々な中から選びます。

塾生は、3会場以上受講します。受講後、学びをレポートに記述し、提出します。

(1) 主な会場と概要

区分	会場等の名称	概要
卒業生 の 授業 公開	「先輩の授業に 学ぼう」	京都教師塾を卒業し、京都市立学校で活躍している「先輩」が授業を公開します。授業後には「先輩」を囲み、意見交流会も行います。学校現場の様子を具体的に学ぶことができます。
各種講座・ 研究授業等	各学校園 研究発表会	各学校園では、研究テーマを設定し、研究を行っています。研究発表会では、各教科等の授業公開や研究協議、講演等が行われます。各学校園が作成した研究冊子も配布されますので、特色ある取組を学ぶことができます。
	研究会主催 研究発表会	各教科等をはじめ様々な研究会が組織され、教員は、自校の枠を超えて研究を深めています。「その道のエキスパート」の授業や取組にふれ、学ぶことができます。
	教育委員会主催 研修会	京都市教育委員会では、教職員の力量を高めるための研修会を数多く実施しています。その中から、塾生の参加が可能なものについて紹介します。
	京都市総合教育 センター 教育研究発表会	総合教育センター研究課では、教育課題をふまえた研究テーマを設定し、実践研究を進めています。2月の教育研究発表会では、テーマに関する理論と、研究協力校での実践授業を通して得られた研究内容及び成果を聞くことができます。



先輩の授業に学ぼう（授業中）



先輩の授業に学ぼう（協議）

(*) 研究会

京都市には、日々の教育実践に対して同じ志を持つ教職員が自主的に組織する127の教科・領域等の教育研究団体があり（平成28年度）、全国に先駆けた意欲あふれる取組を展開しています。

(2) 京都市の教育施設

京都市の教育施設である「京都市野外活動施設花背山の家」「京都市青少年科学センター」「京都市学校歴史博物館」等でそれぞれの施設のスタッフを講師として実践的・専門的な学びを深めます。

ア 花背山の家

花背山の家は、京都市の野外活動施設です。「長期宿泊・自然体験活動」のため、多くの京都市立学校・園が利用しています。

塾生は、指導者の視点に立って野外活動を体験します。



イ 京都市青少年科学センター

京都市青少年科学センターは、100点を超える体験型の展示品を通して、楽しみながら理科・科学を学べる施設です。

塾生は、科学の不思議や楽しさを感じ、科学者精神に触れることを目的とする理科学習である「センター学習」の様子を指導者の視点に立って見学し、その後、協議などを通して理科の学習で大事にしなければならないことを学びます。



ウ 京都市学校歴史博物館

京都市学校歴史博物館は、「番組小学校^(*)」をはじめとする京都の教育の伝統と、学校の運営と創設に力を注いだ町衆の情熱を全国に発信するため、京都市の学校に遺された歴史資料などを収集・保存、展示を行っている施設です。塾生は、ここで京都市の学校の歴史、市民ぐるみ教育の源を学びます。



(*) 番組小学校

京都では、町衆をはじめとする明治の先人達が「まちづくりは人づくりから」の信念により、明治5年の学制公布に先立ち、明治2年に日本で最初の学区制小学校である64校もの「番組小学校」を開校させました。

4 授業実践講座

「授業実践講座」は、学習指導案の作成と模擬授業の演習を通して、授業づくりに関する基礎を学び、身に付けることを目的としています。

指導助言は、各校種・職種担当の指導主事が行います。塾生は、指定する日時の「授業実践講座①」及び「授業実践講座②」に出席します。

(1) 授業実践講座①（学習指導案の作成）

- ア 日 時 4月の指定日の午前または午後 ※第10期は4月16日（土）に実施
イ 内 容 各校種・職種のエキスパートである指導主事の講義と指導のもと、授業づくりの考え方を学び、学習指導案を作成します。



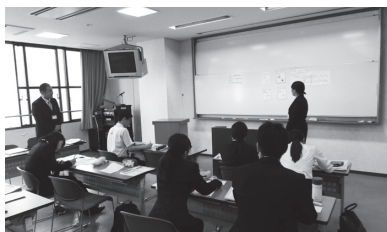
講義を受けている様子



アドバイスをを受けている様子

(2) 授業実践講座②（模擬授業）

- ア 日 時 5月の指定日の午前または午後
※第10期は5月14日（土）、5月28日（土）に実施
イ 内 容 「授業実践講座①」で作成した学習指導案をもとに、塾生一人一人が模擬授業を行い、指導主事からの専門的な指導・助言を受けます。
※ 模擬授業を欠席した塾生には学習指導案を添削して卒業式で返却します。



模擬授業の様子

<カリキュラム開発センターの利用>

京都市教育学講座を開催している京都市総合教育センター3階にカリキュラム開発支援センターがあります。1万8千点の学習指導案や2万冊を超える教科書・教育に関する図書・雑誌その他DVD等の豊富な資料があり、先生のための図書館の役割を果たしています。京都教師塾塾生も利用でき、活用しています。